

意見陳述

三上 満寿男

1、自己紹介

私は、現在中津市三光の八面山の麓で、ブルーベリー栽培を中心に観光農園を行っている三上満寿男といたします。

昭和59年に東海大学第二工学部機械工学科を卒業し、発電プラント建設を行っている東京動力建設株式会社に入社しました。

主に三菱製加圧水型軽水炉（通称 PWR）の原子炉、蒸気発生器、一次冷却水ポンプ、主冷却材管の一次冷却系統及び燃料設備等それらにまつわる補器類の新設に、約10年間従事しました。

原発建設ラッシュの中、待望の純国産第一号になる敦賀2号機をはじめ、所長として泊1, 2号機、大飯3号機を担当しました。

また、東電福島原発のタービン定期点検に、他作業員の線量調整のため応援をし、その他赤穂火力の復水器取替工事にも携わりました。

2、知ってしまった原発の技術

原子力発電所は当時の工業技術の中では、とても優れており最先端技術の塊だと観られていたし、当時私もそう思っていました。

新設される原子力発電所の原子炉に燃料が装填され、試運転までが私の任務です。

工事を数年経験していくと初期段階から携わる為、機器のあり得ない不具合や設計製作の間違い、建屋工事を行う建築JVと機器の基礎関係などの取合い不整合という“粗”が目につくようになりました。

それらは、工事進行するにつれ、どこかの部分であやふやにされてしまい、傍目からは見えなくなっていました。

机の上で書かれた図面は、それは立派で素晴らしいものでした。でも現場とは整合が取れてなく、酷いときには、現状に合うようにこちらがハッチングし、それに

合わせて改訂版が出る。という事もしばしばありました。

私も、機械設計の事は少しは学んでいましたので、その点やりがいは有りましたが。

しかし半面、その部分については安全率などは考慮出来ますが、実質的な安全余裕は、どうなのだろうか、本当に大丈夫なのだろうかと不安もありました。

3、劣悪な作業品質

わずか1年ほどの経験で次の任地の北海道電力泊原子力発電所新設が所長としての赴任です。

私も浅い経験ですが、原発建設の人手不足はピークに達しており、作業員不足は、直接技術力の低下に繋がり、発電所の作業品質は決して良いものではないことは、肌身に感じていました。

製造元の三菱神戸造船所からは技術指導員も来ますが、こちらも同じ状態だったのでしょう。重要機器のため必ず指導員が付きますが、その指示がまさかの失敗を幾回か起こしました。

なかには、担当官庁の認可された部分を極秘に修正する。という有ってはならないことが数回行われたこともあります。

そして、それらの事を元請けなどに聞いてみると、忘れてくれ、それ以上追及は禁物だと、脅される始末でした。

そしてそれは、月日が経つと何も無かったように、揉み消され工事は進んでいきました。

4、原発から離れる決心

そんな有る時期、原発の運転寿命が15年から30年と伸びることとなり、今までの工事实績の実情を知ってる私は、とても怖くなりました。

この先老朽化した原発が安全余裕を食いつぶして、尚且つ最初の設計寿命から1

0年以上も運転を続けるのは、無理だと直感的に感じました。

それだけでなく、安全率なんて机の上での空論なんです。甘い条件を設定すればいくらでも、安全率は稼げるのですから。

この時私は、大飯原発3号機が燃料装填され試運転に入り、4号機新設の計画に入る時期でした。

「今この仕事から離れなければ、きっと後悔する。」

と、決心したのです。

地元に戻り、家業の果樹園を継ぎ自然の恩恵を受けながら暮らし始めました。時々耳にする、原発関係の事故、不祥事はもともと有ったこと。ただそれが表に出たかどうかだけなので、そう驚くことではなかったのです。

5、まさかが現実に

東日本大震災が起き、福島原発建屋が爆発し燃料がムルダウした時、私はきっとこれは原子炉の設計だけでなく、それに携わった全ての方々の技術力の結果が、現れたのではないかと、直感的に思いました。

老朽化した設備、図面通り出来ていない構造物。私にはそう思える節がある。

しかしそれらは、結果として悪いことばかりでなく奇跡も起こし、良い方向にも向かったことも事実です。

私はこれらのことから、「今の技術が進歩しても、人間がすることなので間違いも必ずある。」と言えらると思います。

6、伊方原発も同じ

- ①意図的に条件を甘くし表面上の安全性を確保してる。
- ②安全余裕を絶対的なものとして取り扱い、過負荷でも安心だと過信する。
- ③今まで危険とされていたものを、なにかの都合で基準を下げ押し付ける

①は、南海トラフ地震の危険性を無視し、基準地震動を低く見積もり見掛け上の安全性を確保している

②は、Mox 燃料を、ウラン燃料を燃やす原子炉で使用することは、見掛け上の安全余裕を更に減少させる。

そしてこれは私の憶測ですが、効率の低い原発の運転効率を上げるため、超高压、高温の運転を計画してるのではないか

もしそうであるならば、なおさら安全余裕はなくなる。

③は、内部被爆の基準を下げ、今までの20倍もの高い被爆量でも、ある程度は勘弁しろという福島原発事故の現実。

これは、伊方原発でもあてはまり、東電福島原子力発電所が死の灰を降らせたのは、半径250km圏内が実績としてあり、大分市は70kmの距離、中津市も120kmの距離です。半径250kmは、九州を3分の2ほど覆ってしまいます。

実際に事故が起き最悪の事態となれば、確実にあの福島原発事故の惨状を繰り返すのでしょ。そして見掛け上の状況が収まったとしても、長い年月内部被爆の危険が伴うことは、必至です。

その時、国は東電福島原発の実績と前例を、押し付けてくるのでしょ。

7、結論

私はこのように、現実の状況を見ず、人間の意図的な解釈と辻褃合わせの言い逃れは、到底理解は出来ないのです。

そして原子力発電の本当の姿をこの目で見聞いて、実際に触ってきたからこそ言えることは、見掛け上の安全性のみの原発だから、不用意に運転延長はしたらだめでしょう。自然界にないエネルギーを造り上げて無理やり使い、残渣を処理しきれないのなら、絶対に危険だからやめましょうよ。という事です。

以上